モザンビークNGO活動

松本さん（土佐市民病院看護婦）帰国

現地で懸命に診察協力

「市民カンパ」は井戸掘りに

医療援助のためアフリカ・モザンビークへ自費で赴いていた土佐市民病院の看護婦、松本麻也子さん（三五）＝土佐市高岡町＝がこのほど帰国した。栄養失調や病気がまん延する現地で、精力的に診察に協力。また土佐市の仲間が集めた浄財で、現地の村に井戸を掘ることになり、二週間の滞在を終えた松本さんは「みんなのお金が生きたお援助につながることがうれしい」と話している。

松本さんは、民間の非政府組織（NGO）のAMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）のスタッフ。九月二十五日に一人で現地入り、今春から活動中の吉田修医師（三五）＝徳島県山川町＝と合流し、首都・マプート北西のガザ州・ショクエ周辺で、診察や介護に励んだ。

吉田医師とともに巡回したショクエ県内のスカ所の村のうち、シャングレーネ村では血尿や発熱、胃痛の症状が出る住血吸虫が流行。診察した二百人のうち四割が感染していた。

マプートに着いた日に、PKO活動で派遣されている自衛隊員や視察クエ病院の看護婦や職員らで結成した「モザンビーク沢美和会長）の寄贈した四十五万円で、かんがい施設も電気もないシャングレーネ村で井戸掘削を決定。松本さんは「本当に必要な援助とはなにか、ということも伝えていきたい」と、今後も高知を拠点にした援助活動を続けたい意向だ。

受診に来た現地の患者に体温計のあて方を教える松本さん（モザンビーク・ショクエ県のシャングレーネ村）

松本麻也子さん

に来た玉沢防衛庁長官らのレセプションにかれたが、「道のない地方には援助物資が届かなかったり、先進国の金が現地の貨幣価値を乱すことも。現状にそぐわない高度医療機器が届くケースもあり、援助の難しさ、ジレンマを感じた」そうだ。

こうした中、土佐市民